

## 第9章 総括

本報告書では、本校の教育内容や教育目標が、専攻科修了生、本科卒業生ならびに企業・事業所・官公庁等においてどの程度役に立っているか、どのように評価されているか、を中心に分析してきた。本章では、その中でも特筆すべき事項をまとめ、昨今の教育および社会情勢も参考にしながら教育改善の方向性について指摘しておく。

平成 24 年度の調査と同様に、修了生および卒業生は徳山高専の教育に概ね満足しており、就職先でその能力を十分に発揮できていると自己評価している。彼らを採用した職場もまた、その能力を高く評価している。中でも、これまでは高専生の弱点であると指摘され続けてきたコミュニケーション力に関する評価が高くなっており、従来評価の高かった専門性、協調性ならびに責任感などと相まって、企業ニーズに沿った教育成果が反映されたものであると考えられる。

一方、気になる結果もある。英語力の自己評価が低いこと、職場で英語を使う機会は増えているが学科による差異があること、複合学科の優位性は全体としては高いが学科によって異なること、早期転職の割合が高まっていること、企業等による主体性・自律性の評価が低いこと、などである。

前回調査の平成 24 年以降、教育および社会情勢は大きく変化してきた。教育に関しては、生きる力（文部科学省）、社会人基礎力（経済産業省）をはじめ、21 世紀型スキル、育成すべき資質・能力の 3 要素、基礎的・汎用的能力、STEM・STEAM 教育などのキーワードが出現した。社会においては、少子高齢化、グローバル、終身雇用制度の終焉や、SDGs で目指すとしている各種の課題が山積しており、それらの一部は、Society 5.0 (AI、ロボット、IoT など) としてまとめられた科学技術イノベーションによる解決が期待されている。

上に述べた「気になる結果」は、相当数の卒業生が社会情勢の変化を直接受けていることを示している。1962 年の高専の設立は、産業界からの「科学・技術の更なる進歩に対応できる技術者養成」の要望を受けたもので、まさに Society 3.0 の時代であった。アンケートに書かれた高専教育への要望を見ると、これまでも指摘されてきた事項を多く含み、教育に関する新しいキーワードから解決のためのヒントを得ることができる。つまり、これからの社会を生きる人に必要な資質・能力は、多くの社会人が経験的に必要だと感じている能力そのものであり、突然出現した特別なものではない。

今、高専に対する広く社会からの要望とは何かを考えると、現在起こっている変革の延長線上にある社会に出ていく修了生・卒業生が、高い専門性を軸足として生涯にわたって十分にその力を発揮できるようにしておくことである。少なくとも 10 年・20 年先を見据えたカリキュラムの改訂と、それを持続可能な形で実践できる教育体制を整備しておく必要があると考えられる。

(担当：張間)